

『哲學概論』 附録第二 純粹經驗

西田幾多郎

1 第一章 純粹經驗

實在論は、我々の主觀的世界以外に我々の意識現象より獨立せる客觀的世界のあることを假定して居る。觀念論は意識以外の客觀的世界を否定するが、精神現象の本體である *soil* 〈心〉の如きものを假定して居る。哲學はできうるだけ批判的なる學問であつて、疑ふに疑ひ様のない直接の眞理より出發せねばならぬのであるから、かかるドグマを許しておくことは不當である。たとへ之を許すにしても嚴密なる批判的檢討の後に於てせねばならぬ。カントの批判主義でも知識の内容は外界の *Ding an sich* 〈物自體〉より來るとし、物自體といふ如きものを許して居る。此點はカントの批判的精神とは相容れぬ様に思ふ。

次に合理論と經驗論の議論についても、合理論の人は概念的知識を一種特別のものと考へて居る。併しこは果してさうであるかどうか。經驗論の方でも同じく概念的知識は經驗でないとして居る。しかし哲學はできるだけ直接の知識から出發せねばならぬ。古來哲學者の中に眞に直接な確實性から出發せうとした人は二人ある。一は中世に於けるアウグスチヌスであり、一は近世の始に於けるデカルトである。アウグスチヌスは我々の直接的眞理として *I know. & I love.* といふことをあげて居る。一は我々の眞理の本となり、一は善の本となるのである。「アウグスチヌス曰く。Soliloquia II. 1.: Tu, qui vis te nosse, scis esse te? / Scio. / Unde scis? / Nescio / Simplicem te sentis au multiplicem? / Nescio. / Moveri te scis? / Nescio. / Cogitare tescis? / Scio. 〈獨語錄〉、二の二、汝知ることを求める者、汝が在ることを知るや? / 我知る。 / いかにしてそれを知るや? / 我知らず。 / 汝は單純なるものなりや、複合せるものなりや? / 我知らず。 / 汝は自ら動くことを知るや? / 我知らず。 / 汝が考へることを知るや? / 我知る。」デカルトは例の有名な *Cogito, ergo sum.* 〈我考ふ。故に我あり。〉から出立して居る。

併しデカルトでもアウグスチヌスでも、*cogito, ergo sum* 〈我考ふ、故に〉と云つて *law of causation* 〈因果の法則〉に由つて *sum* 〈我在り〉を推論したものならば、眞の直接の眞理とはいはれぬ。眞の直接經驗の事實は、我がそれを知つてゐるといふのではない。我が知るといふのではなく、ただ知るといふことがあるだけである。否、知るといふことがあるのでもない。赤ならばただ赤といふだけである。これは赤といふのも既に判断である。直接經驗の事實ではない。直接經驗の事實は、ただ、言語に云ひ現はすことのできない赤の經驗のみである。赤の外に「知る」とか「意識」とかいふことは不要である。赤の赤たることが即ち意識である。意識といふものがあつて、それが赤となつたり緑となつたりするといふが、しかし直接經驗にはさういふ抽象的な意識はない。意識といふものがあつて、之が赤から緑に變ずるのではない。赤が緑に變ずるのがそれよりも根本的である。

人はかういう考は Denken (思惟) を無視したものであるといふであらう。瞬間的直観としてはさうでもあらうが、思惟の要求としては意識とか我とかいふことを考へねばならぬといふ。併しその思惟といふものが先づ純粹經驗の事實として我々に現はれて来るのである。チエイムズのいふ様に、思惟といふことも經驗である。to とか from とかいふのも皆經驗である。思惟といつて一種特別の力があるのではない。それで若し思惟の要求が正しいものとしても、思惟が純粹經驗の事實でありながら、それからいかにしてさういふ要求が出てくるかを考究せねばならぬ。思惟の必然性といふことも畢竟純粹經驗の確實性の上に本づくのではなからうか。思惟は直接經驗の screen (幕) の後に入り得る様に考へてゐる人もあるが、その實はこのスクリーンの後に入ることはできないのである。「面々神と相對する所にあり。」

かく云へばカント學派の人々からは心理的と論理的とを混同せるものであるといふであらう。併し余が今ここにいふ直接經驗といふものは、未だ心理的とか論理的とか區別のできない前のことである。かくの如きものが個人の psychical event (心理的出來事) であるかどうか、それは研究した後でなければならぬ。また個人的ともいふことのできないものである。個人的など考へるのもこれで考へるのである。それは個人的とか超個人的とかいふ區別以前である。心理的と論理的との區別もこれで考へるのである。ideal であつても、それが real となる時は、必ずこの形をとつて現はれるのである。

此の如き出立點の疑ふべからざることは誰も承認するであらうと思ふ。デカルトもいつた様に、疑ふといへば疑ひもこれによつて疑ふのである。唯すべての人の恐れるのは之より来る結論である。かくの如き出立點からして遂に Solipsismus (獨我論) を脱することができないばかりでなく、嚴密にいへば瞬間的感覺といふの外何事も云へない極端なる懷疑論に陥るの外ないのはあるまいか。併し獨我論といふのは始から個人といふものを假定して居るのである。これは元來身體といふ考に束縛せられて居るのではなからうか。意識が個人の外に出ることができぬといふなら、今日の意識と昨日の意識とどうして結びつくか。その仕方は全く同一である。單に feeling of personal identity (人格的同一の感情) によるのである。記憶によるのである。しかしかかる人格的同一の感情といふ如きものは、反省の由つて起り来る appendix (附加物) である。之に由つて意識が結合せられるのではない。意識と意識とは直接に融合するのであり、直接に結びつくのである。feeling of resemblance (類似の感情) といふものも appendix である。(それでエbbinghaus Ebbinghaus は連續を聯想の本としたのである。) 人格的同一の感情そのものも意識現象たる以上は、やはりかくして成立したものである。

他人の意識は直接に知ることができぬといふが、リップスのいふ様に、他人の意識を知るのは Analogie (類推) ではなく Einfühlung (感情移入) である。自己の客觀化に由るのである。我々は反つて自己の表現を知らない。他人の意識と結合するときは尙表現の媒介を要すといふであらうが、自分の場合にてもかくの如きことがあるであらう。

自分の場合では one and the same psychose (同じ一つの精神作用) の結合であるが、他人の場合には two independent psychoses (二つの獨立した精神作用) の acquaintance (相識) にすぎないといふであらう。併しいづれの場合に於ても、之を結合するものは二つ共に general idea (一般概念) である。他人の思想を理解し之を展開して行くも、自分の思想を展開して行くも同一である。

意識を個人にかぎり、それがため獨我論に陥るなどいふのは、直接經驗に由り内から見ずして、反省に由り外から見るによるのではあるまいか。内より見れば、唯その内容いかによつて、——即ち qualitative〈質的〉に——連續的とも云へ、また非連續的とも云へる。(ルノーエ Renouvier やヂェイムズなどは經驗を非連續であるといふ。)昨日の意識と今日の意識の連結を許すならば、之と同一の意義に於て自他の意識の連結も許さねばならぬと思ふ。

それで意識が内容的に結合せられれば、一の意識といふことができるのである。我々は普通に意識を時間空間によつて區別して考へて居るが、意識は時間空間によつて別つべきものでない、又之によつて結合すべきものでもない。反つて時間空間の結合は、意識の質的結合によつて出てくるのである。意識の結合の方が根本的である。所謂時間空間は我々の經驗を組織化する爲に起つた形式にすぎない。我々の純粹經驗の世界には數學的な時間空間はない。たとへば現在といつても數學的時間に於ていふ如き眞の瞬間はない。擴がりを有つた現在である。持續といつても、一時間の持續も一日の持續も何ら質的變化なく單に附加されることによつて成立つ如き數學的持續であるなら、かかるものも現實の持續ではない。現實の持續は一時間よりも一日と質的變化を有する持續である。空間といつても我々の空間は筋肉感覺や視覺の質的變化によつて現はすべきものである。數學的時間空間は之よりその質的内容を捨象した形式である。故にどこまでもそれを適用することはできぬ。カントの二律背反の如きものに陥つてしまふ。加之、かくの如き抽象的な時間空間の關係を考へることが已に意識の統一によるのである。

昨日の意識と今日の意識とは、睡眠といふものに由つて分離せられて居るといふ。併しこれらは外から考へたのである。意識の内面から考へれば全く連續的である。「尙一つ、意識は睡眠中も全く無意識でなく、いくらかの持續の感情があるでもあらう。」(もし之が非連續的ならばすべて意識は皆非連續的である。)我々が眠つたとか目覺めたとかいふ意識が之を非連續的となすのである。その人に少しも知らせないでその人の意識を數時間催眠状態に入れ之を覺醒せしめたならば、その人は全く自分の意識が中斷せられたことを感ぜぬであらう。それで我々が連續的と思ふてゐる意識でも、外からみたら非連續的であるかも知れない。勿論それは内から連續的で外から見れば非連續的で、その外から見たといふ方が客觀的で、眞實であるといふであらうが、その外から見たといふことがやはり意識現象といふことを免れぬから致方がない。

上來のべきたつたやうに、我々の純粹經驗は時間空間の區別及び個人的區別も超越したものである。此等の區別は經驗を體系化する圖式にすぎない。然らばその純粹經驗といふ者はどういふものであるかといふに、autonomous, qualitatively, continuous change〈自發的、質的に連續な變化〉である。何故に自發的であるか。我々はこれ以上の實在を知らぬ。この外に制約するものがない。經驗は何に由つて起るかなどといふことは、經驗の説明であつて、この説明によつて實在を動かすことはできぬ。もしこの説明が實在に合はなかつた時は、この説明を變ずる外はない。此の如き自發的なる實在は質的に結合せられて居る。「質的といふことは One〈一〉といふことである。我々の意識はすべて一である。對立するものも一である。眞に絶對的獨立といふものはない。もしかかるものがあれば意識は成立せぬ。」「量的といふことは二つの獨立したものより始まる。」實在は連續的に變化しつつあるのである、一瞬も止まることはない。而しその變化の仕方は各瞬間が將來來たらんとする状態を指示し、既に去れる状態を含んでゐる。ヘルグソンの durée interne, durée pure〈内的持續、純粹持續〉といふ者が即ちこれである。この状態は常に我々の經驗であるが、外

から分析に由つて千萬語を費しても之を述べ盡すことはできぬ。唯内から直接に之を経験しうるだけである。

純粹經驗の活動の方式は之を抽象概念を用ひていひあらはすは困難であるが、試に之を云ひ現はして見れば、かくの如きことであらうと思ふ。即ち先づ the whole 〈全體〉がその一部分から現はれ、徐々にその全體を實現する。併しその一部が現れた時、既に全體がふくまれて居る。デュエムズの That is on the table. の例。「純粹經驗にては前者が後者を motility 〈變容〉するのみならず、後者が前者を變容する。」「經驗は純粹に繼起するのでもなく、純粹に同時的なのでもない。」「音楽家が夢中になつて樂を奏しつゝある時の心持の如きが純粹經驗の状態である。「斷崖を下る時、スタウト Stout.」此の如き状態は知覺にてもある。例へば物を見て居る中も注意は始終動きつゝあるのである。注意は a, b, c, d. と變化して行くのであるが、知覺は一つの出来事である。「思惟でも意志でも實際にはこの形をなす。」思惟作用であつても、選擇的意志であつても、現實の事實として我々の經驗に現する時は、皆内的持續の形で現はれるのである。全體が先づ現はれて、之を分化發展するのである。その根柢にはいつでも根本的直觀がある。馬が走るといふ判断を下す時、先づ running horse 〈走る馬〉の觀念が現はれ来り、之を urteilen 〈判断、分割〉して馬が走るといふのである。(即ち Urteilen der Gesamtvorstellung 〈全體表象の分割〉である。)

最後に、昔から經驗について所謂經驗學派といふもののもつてゐた獨斷を排斥して置かねばならぬ。その獨斷といふのは經驗は受動的であつて、又單純な要素の ensemble 〈集合〉であるといふことである。經驗が受動的であるといふ考は直接的眞理ではなくして、何かの前提より來つた推論である。ロックなどのいつたやうに我々の精神は、tabula rasa 〈白紙〉の如きものである。外から物が働いて經驗を生ずるといふ考から出たものである。併しこの如く外に物あり、之に對して内に心あり、兩者の交渉より經驗を生ずといふ如き事は、反つて純粹經驗を説明する爲の假説である。此の如き考は經驗の事實によつて制約せられてゐるものである。經驗の事實こそ前にいつた様に無制約的である。勿論かくの如き事をいへば、然らば經驗の變化は何から起つてくるか、無より有を生ずることはできまいなどといふ非難が起つてくるであらう。此の議論は後になほ詳論せねばならぬと思ふが、元來かかる考の起る本である因果の法則といふものがいかなる根據をもつて居るものであるか。先づ此事を究めて置く必要があらうと思ふ。

因果の法則といふものはヒュームの哲學に於て既にその根據が怪しくなつたものである。ヒュームは經驗的立場から嚴密に立立してみたが、因果の法則といふことは單に constant succession of phenomena 〈現象の恆常的繼起〉といふこと以上にははれなくなつた。我々が因果性がなければならぬと考へるのは、一の habit 〈習慣〉といふにすぎぬこととなつた。カントではこの因果性といふのは悟性形式であつて、之に由つて經驗を構成する形式であるといふことになつたが、やはり經驗を統一する一の形式にすぎない。今、黒かつた者が何故に次の瞬間赤に變じたか。カントの立場からしても依然として説明はできない。カントはこれは物自體より來るといふのであるが、それは分らぬといふにすぎぬ。例へば石を打ちて火を發するといふが、かくの如き現象の繼起が與へられた事實である。何故にかく變ずるか。因果性によつといつた所が何等新しき新事實を與へたのではない。石の中に火がかく居る譯でもない。石が火を生ずる力をもつて居るのであるといへば分つたやうであるが、その實は x を以て x を説明したにすぎぬ。(モリエールの戯曲。)物理化學的の説明にしても、同一の事實を別の言葉に譯したまでのことである。

經驗の變化といふことは不可説明的であり、直接的である。反つてヘラクレイトスが云つたやうに、變化が實在の真相である。唯この純粹經驗の中に、一つの個體的中心ができる、之より統一するものとせられるものとの區別に由つて、能動的と受動的、主観と客観などいふことがでてくるのである。

以上純粹經驗を外から考へて受動的であるとすると考に對して、かかる獨斷よりは結論はできぬといふことをのべたのであるが、心理學的に考へても之までの經驗論の考へて居ることは誤つて居る。元來我々の意識は單純な心的要素より成り立つて居るのではなく、かくの如き者は心理學者が分析して得たる科學的假説にすぎない。例へば單に赤・感覺といふ如きものは何處にもない。直接經驗はいつでもその時々的人格的である。統一である(ヘルグソン)。過去の經驗でも再生した時は過去の經驗の通りではない(スタウト)。

それから我々の經驗が、感覺又は知覺の如き知的なものをもつて始まるといふのも誤である。我々の意識は始から衝動的である。衝動から始まる。例へば子供のママといふ概念は乳を與ふる者といふことであらう。欲求と衝動の満足とあるのみである。此の形はいかに意識が高い段階に達しても、變ることはない。すべての思想は practical meaning 〈實踐的意味〉をもつて居る。例へば家といふ名詞の如きものでも純粹に知的なものでない、實踐的意味をもつて居る。かく知識は目的に於て實踐的であるのみならず、その活動の形式に於ても意志と同一である。

もう一つこれまでの經驗論は感覺、知覺の如きものを經驗と云つて、此等のものの相互の關係は經驗でないといつてゐる。此點にては反つて合理論と同一である。併し種々なる關係の意識も亦經驗の一種である。ゲーティムズのいふやうに、with, from, to 等皆經驗である。The relations that connect experiences must themselves be experienced relations. 〈經驗を結合するものとの關係それ自身が經驗せられる關係でなければならぬ〉。

2 第二章 主観と客観

之から余の出立點である純粹經驗からして、主観と客観の區別はいかにして起つてくるか、又これからして知るといふことはいかなる意義となるかを考へてみよう。

純粹經驗の状態では主観と客観とは全く一致してゐるのである、否、いまだ兩者の分裂がないのである。例へば自分が物を知覺して居る時の精神状態のやうに、唯ある性質をもつた經驗があるのみである。見てゐる自分もなければ見られる物もない。エルドマン Erdmann の意味に於て、デカルトの所謂 Cogito, ergo sum. である。「エルドマンはデカルトを解して、「私の自我に於ては思惟と存在とは一つに合する、けだし私の存在はただ思惟のうち存するからである」となす。それで「我考へつつあり、我疑ひつつあり、故に我は思惟するものなり」といふ。即ち直覺的確實性である。ヘーゲルもかく考へてゐる。das unmittelbare Wissen 〈直接知〉の状態に於て Vorstellung 〈表象〉と Sein 〈存在〉とが結合してゐる (Encyklopädie, § 64.)。デカルト自身もかく云つてゐる云々。 Respons. ad II Object.]

併し反對していふであらう。かかる時は主観と客観とがないのではない。唯意識となつて居らぬのである。余の所謂純粹經驗といふやうなものは我々の心理的經驗であつて、明に主観的である、と。かかる説を主張する人の客観の根據は何處にあるかを考へて見よう。

我々に客観性の感情を與ふるものは、經驗論でいへば經驗の事實であり、合理論でいへば論理的必然性である。先づ經驗論の方から考へて見ると經驗論の方で或る知識が客観的價值をもつといふことは經驗の事實に合ふといふことである。而して經驗の事實といへば此の純粹經驗の事實の外にないのである。物理学の法則などが客観的であるといふのは、此の事實に於て檢證することができるからである。物理法則といふものは主観的である。客観的實在を理解する Symbol にすぎない (ブートル)。我々の動かすことのできぬ客観的實在は純粹經驗の事實である。機械的法則は客観的であるといふが、やはりこの事實で檢證せられるのである。縦し我々を離れて獨立の客観的實在があるとしても、之を知るのは此の經驗の事實を通じて知るの外はないのである。ガリレイ以來、運動を以て客観的性質となし、他の感覺的性質を主観的としたけれども、これは決して首尾一貫した考ではない。運動の如き、種々の感官に共通であるから客観的と考へられるのである。

次に合理論が客観性の根據とする論理的必然性といふものも、やはり一種の純粹經驗の事實にすぎない。ロツクの所謂 inner intuition 〈内的直観〉である。内的とか外的とか、具體的とか抽象的或は relational 〈關係的〉とかいふことは、前にもいつた様に絶對の區別ではない。

以上の様に考へて見ると、我々に客観性の感を與ふるものは此の純粹經驗の事實である。單に純粹經驗の場所では主観と客観との區別がまだ意識的になつて居らぬといふのみではない。「主客の別は此の經驗の發展上に現じ來る區別である。同一經驗の異なる二面である。かくの如き對立もこの經驗の上で考へるのである。」我々の種々の考は皆此の經驗の事實を説明する爲に起つたものである。すべての思想は之によつて檢證せられねばならぬ。ベルグソンの élan vital 〈生の躍進〉。これが我々の唯一の與へられた事實である。我々が此の客観的事實に接するとか、觸れるとかいふが、その我々といふものが此の純粹經驗の中の一事實である。此の外に存するのではない。元來主観と客観の區別といふのは決して根本的なものではない。此の純粹經驗の上に生じ來つた區別である。本來は物我の區別があつたのではなく、一つの經驗の Field 〈野〉であつたのである。主観と客観を根本的に區別したところから出立した哲學は、始終此の結合に苦しみ、到底矛盾に陥らねばならぬ。主観と客観の一致はその未分以前に求めねばならぬ。

然らばこれから主観と客観の眞の關係はいかなるものであつて、又此の兩者の對立が前にいつたやうな純粹經驗の状態よりいかにして發展し來るか考へて見よう。

我々の意識の始、即ち生れたばかりの子供の意識は全く純粹經驗の状態である。コンディヤツクのいつたやうに、單に光りの感覺だけである。此時には固よりまだ主観と客観との別はないが、經驗の發展するに従ひ、經驗と經驗との中に種々の矛盾衝突を生じて來る。これが主観と客観との分裂の本である。我々の經驗は前にもいつた様に靜止したものではなく、變化しつつあるものである。一つの活動である。體系的に發展するものである。「我々の經驗が systematical development 〈體系的發展〉なることは知、情、意の上に於て之を證することができる。」此の如き經驗の進行はその行路に於て、他の經驗の體系と衝突して矛盾を生ぜねばならぬ。即ち經驗の野の上に不統一を生ずるのである。主観と客観との區別は之から起るのである。

併し此點を明にするには先づ純粹經驗と不純粹經驗との區別、經驗の統一と不統一との意義を述べておかねばならぬ。元來經驗には純粹とか不純粹とか、統一とか不統一とかの區別があるのでなく、嚴密に論ずれば經驗は悉く同一であつて、かかる區別は畢竟程度の差別といふことに歸するのである。しかし先づ何人もそれが純粹經驗であるといふことを異議なく認めてゐるやうなものに

ついで、その特徴をのべて見よう。かくの如き psychoses 〈精神状態〉は二つある。一つは瞬間的知覚で、一つは本能的行動のやうなものであらう。かういふ状態は我々の意識の最も統一した状態である。我々の経験が一中心から統一せられて一の間隙もない状態である。「身體は統一の極致である。純粹經驗は身體と一致する。」心理學的にいへば、思惟、感覺の區別、知、情、意の區別が全くなくなつて一致した所である。しかしそれをかくの如き心理的要素の集合せられたもの見るのは誤である。純粹經驗は一つの生きた事實である。心理的要素といふ如きものは、分析に由つてできた抽象的概念である。

それで純粹經驗はいつでも一であるが、心理的要素の意味で單純といふことではない。又、時間の上に於て瞬間的といふことでもない。知覚であつても仔細に研究すれば、決して一瞬のものではない。眼が物を見るにしても運動して見るのである。又、一つの注意といふことでもない。一つの注意はいくら變じても嚴密な統一を保つた純粹經驗といふことができる。例へば斷崖を下る時の如き、又音楽家が熟練せる譜を奏する場合の如き、皆いかに注意は變ずるにしても、一つの純粹經驗といふことができるであらう。

さてそれから経験が今いつた純粹經驗の状態に於ていつも一中心から發展するものであるならば、いつも純粹經驗の状態に於てあるであらうが、経験の中に比較的 abrupt 〈飛躍的〉な變化といふものが起つてくる。即ち現在の經驗體系には關係のない體系か、又は之と直に結合することのできない體系が起つてくる。此の推移が全く飛躍的で、異質的なれば、反つて衝突がない。(from perception to perception; from thought to perception and from perception to thought.) 「知覚から知覚に移るのには衝突がない。いかに異質的でもなめらかに移つてゆく。之を人は causation 〈因果性〉といふのである。これに反し、一つの純粹經驗の體系であつても、反省に由つて切斷せられる時、衝突が生ずるのである。」「現在の經驗體系に關係のない體系は、我々の努力が弛緩した時に起る。感情や意志が喪失となつた時に起る。間違つた事でも信すれば眞實である。(ニーチェ)。」反つて或る點に於て同じく、而もその大部分に於て異質的である時、その衝突が明に感ぜられるのである。例之、ここに一つの青い花を見て、これは昨日見た花であるといふことを考へる。さうすると現在に見る青い花の經驗の體系と、昨日に見た青い花の經驗の體系の二つが起つてくる。併し現在に起つた昨日の青い花の體系といふものも、單に昨日の體系の進展ではない。昨日のものと關係をもつた現在の意識である。(普通では昨日の體系の再起は經驗ではないやうにいふが、矢張り經驗である。昨日の經驗の延長とみるべきであらう。)「ベルグソンなどは個人的意識の外はすべて抽象的と考へて居るが、超個人的の經驗がある。藝術がそれである。ジンメルはニーチェを評した中に、ニーチェは時間上の普遍を求めたといふ如き語があつたと記憶する。ベルグソンは意識の緊張した時が個人的で弛んだ時が同時的であるといふ。その間に質の差があるのではなく、量の差だけであるといふ。しかし所謂超個人的内容でも緊張によつて個人的となることができぬであらうか。個人的又は人格的といふことには、質的と量的の二つあると思ふ。知覚と概念とは絶対に異つたものとは思はれぬ。」大きく考へて見れば、此の衝突その者を事實として純粹經驗と見ることができぬが、個人的意識だけでは消化し、統一することはできぬ。感情と意志とにて強ひて之をやればやれぬことがないかも知らぬ。しかしかくすればその大部分を切り棄てなければならぬ。そこで個人的意識にてはやはり衝突である、之を統一するにはより大なる中心を求めねばならぬ(推論は超個人的意識の事實である)。かういふやうな經驗の矛盾撞着は知、情、意のすべての方面に

起つてくる。要するに経験の發展上必要なる衝突である。経験の擴大である。

かういふ風に経験の中で衝突が起つてくると、主観と客観との區別はこれから起つてくる。即ちその中に比較的大きな強い経験が客観的となるのである。「大きい」といふことは一つの経験の體系の中に外の體系が包容せられることである、即ち質的の意で、量的の意ではない。「強い」といふのは経験のよく統一せられた状態である。意志 [activity, body] 〈活動、身體〉が経験の最も統一せられた状態である。act 〈作用〉に至つて精神統一の終結である。経験論が感性的経験を唯一の客観的なものと考へたのはこれが quality 〈質〉 [intensity 〈強度〉] に於て最も統一した経験であるからである。之に反し、合理論が理性をば客観的なものと考へたのは、之が最も普遍的且つ最も一般的なる経験であつた故である。併し眞の客観的経験は兩方の性質を兼備したものでなければならぬ。かくの如き経験は偉大な天才の経験である。天才の経験とは、普通の人には理想である者が現實の事實として現れるのである。個性的であると共に非常に一般的なる意味をもつて居る。これは藝術の天才ばかりでなく、すべての天才が皆かくの如くである。

それで客観性といふものは人によつて違ふのである。各自に於て最強の経験が客観的世界である。(夢が之を證明して居る。)[主観と客観の差は程度の差といふことになる。兩者對立の背後に抱括的全體がある。] 然らば全く標準がないかといへば決してさうではない。前にいつた様な標準で経験はすすんで行く。勿論我々はどこまで行つても絶対的経験に達することはできぬかも知れないが。

之に反し我々が自分の思想にて組み立てた一つの思想の世界を客観的と考へるのは誤である。

主観と客観の性質及その關係を上のように考へると、我々が普通に居る「知る to know」といふことも一變して來なければならぬ。「知る」といふこと、We know a thing, a man etc. 〈ある物、ある人等々を知る〉とさういふこと、We know such and such things about the thing, the man etc. 〈その物、その人等々についてこれこれの事を知る〉とさういふことがあつて、acquittance-type と about-type がある。即ち *rwai*, *noscere*, *kennen*, *connaître*, *à élaborer*, *scire*, *wissen*, *savoir* とがある。]

普通には「知る」といふことは主観と客観とが全然對立して相互に作用し、知識といふのは客観から主観に働く印象であつて、物の鏡に映する映像の如く考へられて居る。勿論物の鏡にうつる様に同一でなくても、とにかく外界と何等かの *correspondence* 〈對應〉を保ち、そのシムボルであるところから居る (transcendental realism 〈超越的實在論〉)。かういふ出立点からしては、之についても在來の矛盾を脱することはできなう。

之に反し主観と客観との對立は経験の發展上に於て起る衝突より成立するといふことになれば、「知る」といふことは分裂の状態から統一の状態に歸ることである。唯一つの統一した状態では「知る」といふことはない。衝突に際し、主観と客観と對立した時、認識作用がでてくる。主観の發展の結果一つの統一が生じた時、「知つた」となる。「知る」といふことは内界と外界と對應するところから居る。一つの経験體系の發展である。「チェイムズ曰く、紙を知ることは、rather an allround embracing of the paper by thought 〈臺紙を思惟によつて周圍から抱括する事〉であらう。……then the paper seen and the seeing of it are only two names for one indivisible fact which, properly named, is the datum,

the phenomenon, or the experience. The paper is in the mind and the mind is around the paper, because paper and mind are only two names that are given later to the one experience, when, taken in a larer world of which it forms a part, its connections are traced in different directions. The Meaning of Truth. p. 49]

例へば目前の赤いものは火であるといふことを知る場合に、單に火の映像だけであれば、夢の場合のやうに、これも實在である。主観と客觀の區別があつて確かに火であると信じ、何等の疑がなかつたならば、この考を検證したならば間違であるかも知らぬが、自分だけには知つたと思ふのである。(即ち統一の状態にある。)之に反しいくらかの疑のあつた時、即ち衝突のあつた時は、未だ之を知らぬのである。「知る」時はいかにするか。前の思想を verify (檢證)するのである。即ちこれを展開して見るのである。前の思想即ち判斷とごふのは一の要求である。hypothesis (假定)である、das Allgemeine (一般者)である。檢證するとは、この思想を働かして見るのである。而して統一を得た時、前の思想は眞理となり、「知つた」といふことになるのである。

觀念と對象との關係は das Allgemeine (一般者)と das Individuelle (個別者)との關係である。「この外、「知る」といふことの種々の場合を考へねばならぬ。概念の場合。初の判斷なき場合。」意識は流れて行き再歸せぬから、以前の經驗に歸ると思ふのは誤である。我々が今、火であることを知つた時、前の經驗に對應したのではない。「チェーンズは認識を定義して、The feeling of q knows whatever reality it resembles, and either directly or indirectly, operates on it. (ごふ實存の感は、それが類似してあるところの、何らかの實在を知つてゐるのである、そしてそれに對し直接にせよ間接にせよ、働きかけるのである。)"とごつてゐるが、"resembles"といふことはいかがであらうか。」却つて新しい經驗を創造したのである。前の經驗と關係をもつた新なる經驗が發展したのである。constant and stable reality (一定不變の實在)とごふ様なものはなう。

我々の認識作用は corresponding activity (對應作用)ではなう progressive activity (前進作用)である。一の概念が客觀的となるには發展せねばならぬ、即ち分化せねばならぬ。知覺であつても知覺が必ず客觀とはかぎらぬ。やはり發展せねばならぬ。種々の varieties を統一して必然的に統一したものが最も客觀的である。即ち主觀的經驗(思惟)と所謂客觀的經驗(知覺)と合したものが最も客觀的である。(此點につきロイスなど参照。)

認識といふことを上の如くに解釋してきて認識論の大問題である實在論と觀念論の争を考へてみると、此争は元來主觀と客觀とを二つの獨立した實在の如くに考へるより起るのであると思ふ。若し此の二つの獨立のものと考へるならば、どうして此の二つの者の間の相互作用ができるか、これが第一の問題である。若し主觀を主として考へればすべてが主觀となり、客觀を否定せねばならぬ様になる。逆に、客觀といふものを立てようとするれば、どうしても一つのドグマを作らねばならぬ。何か經驗を超越する一つの神祕的な力を假定せねばならぬこととなる。之に反し今いつた様に考へれば、主觀と客觀は時間と空間のやうに經驗の Form (形式)である。實在ではない。二次的のものである。此等の對立のないのが根本である。於是また素朴的實在論に返つてくる。唯、素朴的實在論は首尾一貫してゐない。觸覺や視覺の如きものを過重してゐる。

3 第三章 思惟と經驗

次に思惟と經驗の關係を論じて見よう。この關係からして認識論に經驗論と合理論の議論が起つてくるのである。この二派の論はやはり理性と經驗とは全く異なつた力であつて、我々の知識には二つの源泉ありとするより起るのである。何故に理性が經驗と違つて一種特別の力であるかといへば、理性はその性質からいへば抽象的で、起源からいへば先天的必然的で、確實性或は妥當性からいへば普遍的であるといふことである。經驗といふは之に反し、具體的、偶然的であり、後天的に知ることができる、必然的且つ普遍的といふことがないかも知らぬが、その代り客觀的であるといふのである。

合理論と經驗論との争は、此のいづれを以て眞理を與ふるものであるかといふにあるが、此の二派の中に以上の如く二種を許して、認識論上二元論を立てて居る人もあるが（多くの合理論者や、經驗論者の中ではロックのやうに）、またその中で一つだけ許し、他を之より導き出さうとする人もある。ヘーゲルのやうな人は思惟を唯一の力として經驗の中にも思惟の性質を求めようとするのである、即ち經驗は未だ發達せない思惟と見るのである。（ライプッツの petites perceptions〈微小表象〉と比較せよ。）その結果は餘りに論理的性質を強調して經驗の性質に十分なる權利を與へて居らぬやうに思はれる。彼はすべてを矛盾律から導き出さうとした。「自然哲學」に於てのやうに經驗的事實をも思惟必然性より導き來らうとするに至つた。

之に反して經驗論の方では又經驗を主として思惟を否定した人もある。バークリは抽象的概念を否定して、mere name〈單なる名前〉として了つた。所謂唯名論の説がそれである。ヒュームなごころは概念は faint image〈微弱な心像〉といふことになつて居る。ミルなどは論理的必然性といふことも習慣より説明しようとした。併し此等の説は又思惟の性質を十分に justify せずして否定した様に思はれる。

唯一つ經驗論の系統より出て思惟に正當な權利を與へて居ると思ふのはチェイムズの radical empiricism〈根本的經驗論〉である。この事はこれまで敷説したこともあるが、關係とごころも經驗であるごころのでもある。即ち思惟も經驗の一種のごころになるのである。A World of Pure Experience とごころ論文の中に次の如きことをごころ居る。"The Relations that connect experiences must themselves be experienced relations, and any kind of relation experienced must be accounted as 'real' as anything else in the system."〈經驗を結合するごころの關係はそれ自身が經驗される關係である、そして經驗されるいかなる種類のものも、その體系の中の他のいかなるものとも等しく現實的と考へられなければならないごころ。〉"To be radical, empiricism must neither admit into its constructions any element that is not directly experienced, nor exclude from them any element that is directly experienced."〈根本的であるためには、經驗論はその構造の中に直接に經驗されないいかなる要素をも許してはならない、しかしそれと共にその構造の中から直接に經驗されるいかなる要素をも除去してはならない。〉しかしチェイムズは、概念は實在の substitution〈代理〉であるごころに考へ、「プラグマティズム」に於て、思惟は單に conventional〈便宜的〉であるごころに於てある。この點は、經驗論の傳統に従つて思惟に十分の權利を與へて居らぬ様には思はれる。

余の考では所謂 perceptive experience〈知覺的經驗〉と思惟即ち inner intuition〈内的直觀〉とは同一の經驗であつて、唯程度の差であり、性質の差別ではないと思ふ。一寸考へた所では知覺は

單純であつて受動的の様に見えるが、その實は複雑であつて構成的である。知覺の中にはいつでも ideal elements (理想的要素) が混じてゐる。(暗中心にて物を電光にて瞬間的に照らしてみる場合の如き)。我々の精神は活動を以て始まるのであるから、知覺と雖も元來は動的である。(物を取るといふ衝動より種々の感覺器官ができたといふ様に)。眼も運動に由つて物が見えるのである。眞に單純感覺といふものはない、ヘブディングのいつた様にコントラストといふことが意識の成立する條件である。(即ち關係をもつてをる)。翻つて思惟といふ方を見ると、思惟とは關係の意識である。思惟は普通全く抽象的であると考へられてをるが、思惟にも具體的なる部分がなければならぬ。例へばバークリのいつた様に、三角形といふことを考へるのに抽象的な三角形といふものは表象することはできぬ。必ず何か具體的な三角形といふものを考へねばならぬ。バークリなどはこの故に概念は單なる名前であるといふが、併しかくの如き representative triangle は one particular triangle ではなく) one particular triangle with something である、即ち fringe (縁量) をもつた三角形である、而して此の縁量もやはり一つの経験であるのである。概念はかくの如きもので、直觀的眞理といふ如きは二つの概念の間の關係の意識で、やはり一つの経験である。

思惟するといふことは普通に二つの概念即ち主語と述語を結合する精神作用であると考へられて居る。併しその實は思惟といふものにはその根據に一の直觀がある。判斷といふことは獨逸語の urteilen が示す様に一つの全體が分割せられて生ずるのである。例へば「馬が走る」といふ判斷には先づ「走る馬」の心象が現はれ來り、之を分析して「馬が走る」といふ判斷が出てくるのである。數學的眞理の如きものでも、綜合的判斷には之を綜合する即ち二つの概念を包含する直觀がなければならぬ。ロックのいつた様に論證といふのはかくの如き過程の連續にすぎぬ。

そこで知覺も複雑で、構成的であり、即ち對立がある。思惟もその根柢に一つの直觀があつて、對立はこの直觀の上に現れるのである。その差異といふのは純粹經驗の統一の程度の差であると思ふ。即ち知覺といふのは比較的統一せられた経験であつて、所謂思惟といふのは比較的不統一なる経験をいふのである。それで思惟でも (習慣に由つて) 統一ができれば一の知覺となつてしまふ。(逆に、知覺は分析に由つて思惟となるが)。「存在と價值。意味と事實。普遍と特殊。存在の前に意味があるといふが、直接の世界は却つて意味の世界である。當爲と存在。基礎としての神祕的直觀。」

思惟と經驗の區別は抽象的とか具體的とか、限定されてゐるとか限定されてゐないとかいふことではない。統一不統一はこのことに關係はない。外界からその統一を破るものがなかつたならばいつもそれが具體的實在と信ぜられて居る、(夢に於てのやうに)。又内からいへば satisfaction (満足) があればそこに具體的實在があるのである。意圖なり目的なりが實現され、満足を得てゐるところが具體的實在なのである (デューキ)。

知覺には客觀的實在が對應せなければならぬといふが、客觀的實在とは前に認識の作用について云つたやうに、この純粹經驗の事實の外にあるのではない。ラッド Radt などには知覺と概念との種々の區別をあげて居るが、余は Movement (運動) を伴ふか否やといふことが、その主要な區別ではなからうかと思ふ。而してこの運動といふものは我々の意識の最も統一せられたる状態である。思惟には之を缺く故に主觀的と見られるのである、(固より絶對にそれを缺くのではないが)。

それで思惟と經驗といふものは絶對的區別のあるものではなく、兩者共に同一の組織より成つて居るもので、いはば二つ共に純粹經驗といふべきものであると思ふが、その互に異なつて居る方面を云つて見れば、所謂經驗といふ者即ち知覺といふものは經驗の統一の方面の著しきものであつて、思惟といふものは差別の方面の著しきものである。前者の方は強固なる安定した經驗であるが、その代りその Umfang〈外延〉は狭い。思惟は之に反し一つの體系をなさないがその外延は廣いといふべきである。固より一方より見れば知覺は偶然的で、反つて思惟の方が一つの體系をなす、即ち必然的關係を有つとも云へるのであるが、余が此處に統一といふのは意志と感情の方も入れての考である。いかに體系をなした思惟であつても、意志と感情の方の統一をかいて居れば、具體的經驗より見て統一とはいはれない。美と善の様に感情と意志の方面にも、統一といふものがある。

思惟といふものは經驗が發展するのに必要な一つの過程である。前にいつた様に、經驗が發展する場合に經驗體系の衝突より主觀と客觀の區別ができるといつたが、思惟はかかる場合の生ずるのである。感情や意志の方面の弱い體系をなさぬ部分が思惟となるのである。主觀的といふことと思惟は一致するのである。勿論普通には感情と意志の方を反つて主觀的といふのであるが、深く考へて見れば前にもいつたやうに感情プラス意志なる具體的經驗を離れて、單に思惟の對象にすぎぬ客觀的なものといふのは、反つて我々の構成に由つてできた主觀的世界ではなからうか。例之、物理学でいふ如き客觀的世界は反つて主觀的ではないか。

例之、今みた花によつて昨日の花を思ひ出し、これが昨日の花であるといふ場合に、昨日の花といふのが思惟である。論理的思惟といふ如きものも之と同じきものであるが、その外延の最もひろきものである、(記憶は所謂個人内の統一で、理性は最大の統一である)。

現今のプラグマティストの議論からいへば思惟といふものは全く practical meaning〈實用的意味〉をもつたのみの、實在に關係ないものであるといふ。ベルグソンは本能が吾人の生命を示すもので、思惟は全く instrumental〈道具的〉なるものであるといふ。知的といふことは instrument〈道具〉を用ゆるより起つたものであるといふ。勿論發達の上からいへばさうであるかも知らぬが、思惟の發達と共に思惟その者が一つの新しい生命を作るといふことはないであらうか。氏は藝術は生命であるといふが、藝術といふものも知性の發達に負ふ所がないであらうか。勿論極めて生命の縁に遠い思惟もあるであらうが、これは思惟としても尙ぶべきものでなからうと思ふ。

〔思惟と經驗との關係を以上の如くに考へることができらば、認識論の問題であつた合理論と經驗論との爭論も此點から解決することができるであらうと思ふ。思惟も經驗も純粹經驗としては同一構造のものである。唯その統一の方面の著しきものと差別の方面の著しきものとの區別といふことになるのである。〕

4 第四章 眞理

之より純粹經驗の立場よりして眞理といふことをいかに解するかを述べて置かねばならぬ。眞理といふことは普通の解釋にすれば我々が主觀的に考へたことが客觀的事實に合ふことである。即ち主觀的世界と客觀的世界の correspondence〈對應〉といふことである。併し前に主觀と客觀の關係について話した様に、對應といふ考はその根柢に於て一のドグマをもつて居りはせぬかと思ふ。極めて批評的なる考からして、このドグマを除去して見なければならぬと思ふ。〔さうし

て見ると対象を知るといふことは、経験が自己を超越するのではなく、経験の中での關係であるといふことになる。」

且つ單に對應といふけれども、對應にもいろいろあるであらうと思ふ。内容に於て全く對應してしまへば對應といふのではなく、同一である。對應といふ時には何らかの點に於て異なつて居るといふことを意味して居らねばならぬ。「對應の最も便宜的であるものはシンボルである。例之、言語の如きものである。超越的實在論などの對應はかくの如き意味のものであらう。」〔併し idea 〈觀念〉が perception 〈知覺〉に對應するといふ様な場合は之とは少しく異なり、内容の對應といふことであらう。〕

いづれにしても對應は同一ではなく、何らかの點に於て異なつて居らねばならぬ。然らば何物が之を對應せしむるのであるか。之を結びつける所のものがなければならぬ。

例之、clairvoyance 〈千里眼〉のやうなもので自分の頭に映じたものと客觀的實在と全く同一であつても、之は眞に見たとはいはれない。「知る」といふことには context 〈脈絡〉の上からの連絡がなければならぬ。單に resemblance 〈類似〉といふことで、その外に兩者を結びつける何等の脈絡もなかつたならば、いづれがいづれに對應したのであるかも不明である。類似といふことだけでは何の説明にもならぬ。

それで、客觀的世界への類似といふことになるのであらうが、その客觀的世界とはどういふものであらうか。然るに客觀的世界には、前にいつたやうに二つあつて、一つは perceptive reality 〈知覺的實在〉、一つは logical necessity 〈論理的必然性〉である。それで對應するといふのは、この二つの實在に對應するといふことである。

先づ觀念が知覺に對應する場合を考へてみる。もし同一であれば同じものとなり、また單に類似なればいづれがいづれに對應するかわらぬ。知覺が觀念よりも一層生々としてゐるとか、感情及び意志を伴ふとかいふことがなければならぬ。それこの場合には、經驗に二つの序列がある。一つは知覺であり、一つは觀念である。一つは強烈であり、一つは微弱である。併し此の二つの序列は、又全然獨立のものではなくて、之を包含する一つの體系があると考へねばならぬ、さなくば此の二つを比較することができぬ。かういふ様に經驗の二つの序列が一つの包含的全體の中に成立し、而してその中に甲より乙への傾斜がなければならぬ。對應するといふことは、一方のものが一方の者に近づき、傾斜のなくなることである。此の如き process 〈過程〉である。對應の極は同一である。抽象的觀念といふものは、それ自身に於て不安定なものである、何等かの缺點をもつたものである、unbestimmt 〈限定されてゐぬもの〉である。それで完全になることを求めるのである。かく考へると前の三つもの「即ち二つの序列と一つの包含的全體」からなる經驗の體系の様にしたのも、實は one process 〈一つの過程〉になつてしまふ。對應するといふことは developing tendency 〈發展する傾向〉である。進行或は方向の意識である。知覺的實在を感情及び意志より離して考へ勝であるけれども、それは誤である。感情及び意志は知覺の性質にも關係があるであらうと思ふ。

次に論理的眞理といふのは互に矛盾のないこと、即ち矛盾律に由ること、一より他が導き出されるのである。思惟が體系化せらるればせられる程、眞理と感ぜられるのである。最も眞理と信ぜられるものは根本的法則から必然的に發展するものをいふのである。「此の如き必然的發展は論理的眞理の場合のみでなく、美的眞理、論理的眞理にもある。」

更に物理學などの眞理は前の類似などよりは一層すすんだものである。眞理は經驗の發展である

といふことが尙一層明になつてくると思ふ。單に類似では眞理とはいはれない。類似の理由がなければならぬ。理由といふのはかくなるべき必然的條件である。經驗は單に類推ではなく演繹的方法に由つて眞理となるのである。この演繹といふのは經驗の dynamic state〈動的状態〉より考へたものである。(勿論前にいつた様に、單に内容の類似といふ場合にも此の方面はあつたのである。唯之を見逃して居たに過ぎない。それで correspondence of context〈脈絡の對應〉と correspondence of relation〈關係の對應〉とは別物ではない。一つの作用の兩方面である。)

〔思惟と客觀的世界の對應といふが、此の客觀的世界といふものは、思惟に由つて組立てたものに過ぎない。此思惟が經驗に由つて檢證せられるといふのは思惟に對應するものを知覺的世界の關係に於て見出すといふことであつて、此の對應は前にいつた内容の對應と同一である。〕

關係或は形式の對應と内容或は脈絡の對應とは、絶對的に異なつたものでなく、同一性質のものであらうと思ふ。脈絡なき形式も、形式なき脈絡もないのである。〕

〔correspondence〈對應〉の種類。〕

1 identity〈同一〉 2 resemblance〈類似〉

1 content〈内容〉 2 relation〈關係〉

對應は之を結びつける context〈脈絡〉がなければならぬ。〕

それで眞理といふのは、經驗が自分を超越して外界の實在に對應するのではなく、經驗の發展したものが眞理である。〔ロイス、 $1 + \frac{1}{2} + \frac{1}{4} + \dots = 2$ 〕

それで眞理はいつでも未完成のものであるが、我々はその時に最も統一したものの、即ち主觀と客觀の合一したものを眞理とする外ないのである。絶對的眞理といふものはないであらうが、經驗の中に自ら秩序あり、一つの體系をなすが故に眞理を定めてゆくことができるのである。

懷疑論は單に瞬間的意識だけを見て居るから無標準となるのである。その背後に時間とか、個人的自我とかいふ獨斷があつて、之から來る推論である。併し意識は時間と個人とを超越したものである。此等の者は反つて意識の統一から生ずるのである。

Illusion といふものは、個人に於ては事實であるが、一般的に誤謬であるといふことなどが、一見矛盾の様に思はれるけれども、それは個人の場合に眞理であつて、一般の場合には誤謬であるのである。場合が異なつて居るから、矛盾といふことはないのである。自分に今、或物が赤く見えるといふのが眞理であつても、それだからすべての場合といふことはできぬ。事實と眞理といふことに就ては、自分は個人の統一が事實であつて、一般の統一が眞理といふことであると思ふ。〔實在を Process〈過程〉と見れば、Correspondence-Theory〈對應說〉と Coherence-Theory〈首尾一貫說〉とを統一することまできぬ。〕